

第3章 ディスカッション・各グループのレポート

1 あらゆる人の活躍グループ

ファシリテーター：Mr. Martin Polaine

PY：32名

(1) ディスカッション・トピックの論点

あらゆる人の「エンパワーメント（活躍に導く）」の理想形を青年はいかに現実化できるか。

(2) 事前課題

個人課題

障害のある若者の声が届き、将来の展望が開かれる支援を、非政府組織がどのように行い得るかについて、シナリオを考案すること。非力な集団の活躍に資するためにはどうすればよいかを考えるねらいがある。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- なぜ社会の一部が非力に陥っているかを知る。
- 「エンパワーメント」とは何か、また様々な分野で何を意味するかを理解する。
- 権力や影響力を持たない者が誰であるかを知る。
- エンパワーメントがどうして必要なかを理解する。

活動

グループ・ディスカッション

- 社会の一部の人々にとって自らの声が届き、意思決定に影響を与えるうえでの障壁となっているものは何か。
- 「エンパワーメント」とはどういうことか。
- 非力であるのは誰か。
- 「エンパワーメント」の目的とは何か。

成果

- 「エンパワーメント」の定義について統一見解を持った。
- なぜ社会では一部の層が非力に陥っており、エンパワーメントが必要とされるのかを理解した。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 主なステップが何か、青年はそこでどう貢献し、社会の他のグループと協働できるかを知る。

- 多岐にわたる少数利益を支援するうえで何ができるか、青年の役割とは何かを知り、考えをめぐらせる。
- エンパワーメントに対して起こる抵抗（ある弱者層によって他の弱者層に向けられたものも含む）の性質がどのようなものかを知り、その対抗策を見出す。
- SDGsや関連する取組の目的と、それらが青年の関わりにどう影響するかを明らかにする。

活動

グループ・ディスカッション

- エンパワーメントには、前提となる要件や主たるステップが存在するか。
- 社会の様々な層に発言権をもたらすアプローチとしてはどのようなものがあるか。
- どういった抵抗が起こる可能性があるか、それに対する最適な対抗措置とは何か。
- 活躍へのサポートに対して、SDGsやその他の国際的な取組はどうすれば最も機能するだろうか。

成果

- エンパワーメントへの4大ステップを構築し、統一見解とした。
- エンパワーメントへの抵抗についてはどのようにして見つけ、対策を講じるのかを知った。
- エンパワーメントが最大化されるためにいかにSDGsを用いるかを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 個人によるエンパワーメントについて理解し、それが社会一般に目を行き届かせる指導層の養成に重要であることを理解する。
- 個人の力や行動が最も機能する方法を見出す。
- 個人及び集団の力を組み合わせて、効果を最大化する。

活動

グループ・ディスカッション

- 個人的なエンパワーメントとはどういうことかにつ

いて、また、より広範な社会にとってそれがどうして重要なのかを知る。

- b. 青年個人が他者の利益のために、どのような個人的なエンパワーメントができるだろうか。
- c. 個人及び集団によるエンパワーメントがいかに相互補完できるか。

成果

- a. 個人的なエンパワーメントの性質と、それが集団的なエンパワーメントをどのように補完するかについて意見の一致を見た。
- b. 他者を後押しするうえで、個人的なエンパワーメントが最も有効活用されるにはどうすれば良いかが分かった。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 実現可能な「行動計画」を、青年の役割を含めて作成する。
- b. 特定の集団や立場を対象とした際の内容を組み立てる。
- c. 達成後に最も効果のある助力とは何か、青年の役割を含めて明らかにする。

活動

グループ・ディスカッション

- a. エンパワーメントの「行動計画」の中身とは何か。
- b. 特定の立場や虐げられた集団に対してはどのような追加手段が必要か。
- c. 達成後に最も効果のある助力とは何か。

成果

- a. エンパワーメントの「行動計画」を作り上げた。
- b. 特定の立場や集団に対して必要な追加手段を明らかにし、行動計画に盛り込んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Ms. Baljit Ubhey（英国検察庁（イングランド・ウェールズ）戦略・政策部長、前ロンドン地検首席検事、英国の初代「多様性及び平等」担当部長）

トピック：自己と他者へのエンパワーメント

講義から学んだこと

- a. 自分を信じること及び他者を励まし励まされることの重要性
- b. 目標や大志を持ち、達成に向けて歩み続けることの必要性

(4) 成果報告

- a. DG1では、エンパワーメントについて、自分で意思決定でき、自らの生活の基本的な要件を満たせる能力と主体性として定義した。活躍に向けて後押しさ

れているという状態は、同時に、他者を後押しすることができる状態であることを意味している。

- b. DG1では、東南アジアや日本における数多くの社会課題に目を向け、成功している取組の多くは若者によるものであることを知った。しかしながら、更に多くの行動が必要とされている。
- c. DG1では、エンパワーメントの枠組を構築し、以下を含むものとなった。それらは計画、実行、モニタリング・報告、評価であり、これらを経て、新たな計画立案に繋がっていく。
- d. DG1の行動計画はエンパワーメントの4本柱から成り、(1) 知る、(2) 在る、(3) 行う、(4) 他者に働きかける、である。
- e. 若者が必ずしもいつも経済的・時間的・人的に有利な立場にある訳ではないが、DG1では今回の行動計画が今後、青年のエンパワーメントの有用なジャンプ台となることを望んでいる。

(5) 自己評価

DG1のメンバー全員が、本事業によって大変素晴らしい機会を得ることができたと認識している。「将来にわたる友情を築き、国境を越えた知見を拓げ、大いに触発された」とは、メンバー全員の言葉であり、強調するところであった。さらに、今回作成した行動計画は、今後の活動に際して有用であり、効果的に使うだろうという意見で一致している。

(6) ファシリテーター所感

- a. DG1は、ディスカッションや解決策の作成においてグループとして非常に生産的であった。多くが学生で、仲間の意見を尊重する姿勢を持ち、常に有意義に分析していた。
- b. エンパワーメントというトピックの性質上、繊細な問題についてのディスカッションにも及んだが、それらはすべて友好的、生産的に行われ、心を揺さぶるような個人的な経験が詳しく共有されることも多かった。
- c. グループ内では手を尽くして意思決定が行われ、常に理性的に議論し、明瞭なコミュニケーションがなされていた。
- d. 今回作成されたエンパワーメントの行動計画やその4本柱の戦略は、持ち寄られた個人の経験談及び東南アジアや日本中から寄せられた学びに根差すものであった。
- e. これほど意欲的なグループのファシリテーターであることを大変光栄に思い、共に過ごした時間によって全員が意思決定力、リーダーシップ、文化横断的な意識、そして今後も続く固い友情を強められたのであれば幸いである。

2 貧困、水・食糧へのアクセスグループ

ファシリテーター：Mr. Rahmat Hidayat HM

PY：30名

(1) ディスカッション・トピックの論点

ASEAN各国及び日本において、水・食糧へのアクセスを提供し、貧困を撲滅するうえで青年がどう貢献できるかを理解する。

(2) 事前課題

個人課題

身の回りで見られる貧困、水・食糧へのアクセスに関する画像をSNS上に投稿すること。インターネットから探してきたものではなく、自らが撮影したものであること。

国別課題

貧困、水・食糧へのアクセスについての自国での課題に関する図を作成すること。提出は事業開始前とし、グループ・ディスカッションIで使用する。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 期待される成果、スケジュール、ツールについて理解する。
- ファシリテーター及びPY同士について知り合う。
- ASEAN各国や日本における貧困問題や解決するにあたっての障壁、政策について知る。

活動

- 活動1：事業及びPYの紹介
- 活動2：国別発表:ASEAN各国及び日本における貧困問題や政策についての理解
- 活動3：ASEAN各国及び日本における貧困問題や水・食糧へのアクセスの問題の原因や解決するにあたっての障壁

成果

- PYは、期待される成果、スケジュール、そしてディスカッションの流れについて理解した。
- ファシリテーター及びDGの仲間について、よりよく知ることができた。
- 案出しにオンライン・アプリケーションのJamboardやMiroを用いて、貧困問題の根本原因について理解し、明らかにした。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 政治、経済、社会、公衆衛生、技術が、貧困や水・

食糧へのアクセスにどう影響するかを認識する。

- SDGsの一部として貧困を認識する。

活動

- 活動1：全体の振り返り及び目標の確認
- 活動2：PESTという手法を用いた貧困の分析
- 活動3：SDGsに包括される貧困、飢餓根絶、水へのアクセスについてのディスカッション

成果

- 政治、経済、社会、公衆衛生、技術が、貧困や水・食糧へのアクセスにどう影響するかを、PESTという手法を用いて知ることができた。
- SDGsの目標のうち、貧困（目標1）、食糧へのアクセス（目標2）、水へのアクセス（目標6）について理解した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 貧困に対して影響を及ぼす可能性のある状態・環境を予見することができるようになる。
- ASEAN各国及び日本における貧困撲滅のためのプログラムについて理解する。

活動

- 活動1：ゲストスピーカー講義
- 活動2：国ごとに、自国における貧困を減らすためのプログラムについて発表する。

成果

- ASEAN各国で行われている複数のプログラムについて理解することができた。
- 実際の事例から、貧困を減らすためのプログラムの成否を分ける要因は何かを理解した。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. M. Alif Timur Ghifari（インドネシア共和国貧困削減促進ナショナルチーム計量分析専門官）

トピック：ASEANにおける貧困削減と、その進展・プログラム・障壁

講義から学んだこと

- 貧困問題に対峙する際、必ずしも大掛かりなプログラムを実行する訳ではない。
- また、直ちに賃金や消費のレベルを上げるようにしなければならない訳ではない。
- 重要なのは、事業介入等により、中長期的に賃金や

消費を向上させる見通しが立っていることである。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- 政策がどのようにつくられているかを理解できるようになる。
- 政策立案ができるようになる。
- 立案した政策を利害関係者に説明できるようになる。

活動

- 活動1：全体の振り返り及び目標の確認
- 活動2：貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題への解決策の案出し
- 活動3：互いに立案した政策についての評価・意見交換

成果

- 現状に存在する実際のもしくは代替の解決策を分析して、政策立案することができた。
- 利害関係者が誰かを明らかにし、相関図をつくり、立案した政策の利害関係者への説明が可能になった。
- PYは発表を成功に収め、貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題に青年として参画することを宣言した。

(4) 成果報告

ディスカッションの成果報告の内容は、貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題の発見、各国で実施されている代替策、それらに対する分析と政策提言、そして青年による貢献についてなどであった。発表は、ブルネイ、インドネシア、ベトナムからの3名のPYが担当した。

(5) 自己評価

成果報告後の最後の集まりで、PYは自己評価について共有し合った。Zoom会議中に、オンライン・アンケート調査と口頭での評価を実施した。以下はその抜粋である。

- 参加者の一部は緊張していたため、全体ディスカッションの際になかなか発言できなかったものの、「東南アジア青年の船」青年会議は、ASEAN各国及び日本の青年と交流し、繋がりを持つとても良い機会であった。
- 大多数のPYが本事業で多くを学び、得た知識や能力を学問や仕事に活かしたいと述べた。
- なかには、自国に慢性的な貧困が見られないことを知り幸運に思ったPYもいたが、同時に、貧困の渦中にいたり、困難な生活を強いられていたりする他者へより寄り添えるようになった。
- 本事業終了後も繋がりを持ち、コロナ禍が終われば実際に会いに行けることを望むという意見で全員が一致した。

(6) ファシリテーター所感

- 全体ディスカッションでは積極的でないPYも見られたため、全員に発言を促すうえでブレイクアウト・ルームはとても有効だった。
- 時間の制約や技術的な問題が発生したため、手法や事前に計画していた活動の調整を行った。
- 次回は船内でのディスカッションができることを心待ちにしている。

3 働き方と経済成長グループ

ファシリテーター：Ms. Dini Hajarrahmah

PY：31名

(1) ディスカッション・トピックの論点

雇用が大規模に喪失されたコロナ禍後の社会において、質が高く働きがいのある人間らしい仕事を供給することで、ASEAN各国及び日本の青年をいかに動員して持続可能な雇用と経済成長を達成できるだろうか。

(2) 事前課題

個人課題

- コロナ禍と若者の失業問題についての事例の記事を2本読むこと。
- 以下を始めとした質問に対する回答を1ページのパワーポイントで作成すること。雇用及び働きがいのある人間らしい仕事の定義とは何か、将来の仕事像

はどうなっているだろうか、本トピックに関して自国で最も高い障壁となっている問題は何か、自国において最も弱者の立場にあるのは誰か。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 「働き方と経済成長」に関して全てのPYの背景や興味関心、考えや現状打破への気持ちを知る。
- SDGsの一部としての「働き方と経済成長」について理解する。
- 本トピックの最も困難な問題は何か、また、コロナ禍で失業に見舞われ最も影響を受けたのは誰か、を

理解する。

活動

- トピックに関する発表を行い、個々人の身の回りに起きた経験を共有し、各自の基礎知識や何を学びたいかをもち寄って議論を行う。
- チームに分かれてブレイクアウト・ルームで自分の言葉で「働き方と経済成長」を説明し、本トピックに関してASEAN各国及び日本において最も困難な課題は何かを議論し、コロナ禍における失業で最も影響を被ったのはどういった層なのかを議論する。
- 全体での発表

成果

- クイズを交えて楽しく他の参加者と知り合うことができた。
- 6つのチームに分かれ、チームごとに「働き方と経済成長」の定義、本トピックに関する障壁、失業によって最も影響を受ける層について検討した。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 持続可能な働き方と経済成長に向けた、職場における「共生と多様性」について、見本となる取組から学ぶ。
- 「職場における無意識の偏見」について学ぶ。
- チームで「平和と根気強さを生み出す、働きがいのある人間らしい職場環境には何が必要か」を議論する。

活動

- 事前のミーティングで提供された文献及び動画についての総論的なディスカッション。
- 「持続可能な働き方と経済成長のための共生、多様性、平等」について見本となる取組から学ぶ。
- ブレイクアウト・ルームに分かれて、チームで「平和と根気強さを生み出す、働きがいのある人間らしい職場環境には何が必要か」を議論する。
- 「最も働きがいのある会社」からの主な学びについて発表を行う。

成果

- 職場に共生、多様性、平等をもたらすこと、そして特に、同僚への「無意識の偏見」について、より意識的になった。
- 平和と根気強さをもちやす最高の職場環境には何が必要か、また、働くのに理想的な会社に求める要素を明らかにできた。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 「起業家精神」の重要性及び、これをどう養い、青年の雇用を促せるかを理解する。

- 変化を促進し、雇用及び働きがいのある人間らしい仕事を生む「社会起業」の役割を理解する。
- LEAN CANVASというツールを用いて、#DecentJobsForYouth（若者のための働きがいのある人間らしい仕事）を促進するアイデアを考案する。

活動

- 青年の雇用のための「起業家精神」と、変化を促して地方に働きがいのある人間らしい仕事をもたらす「社会起業」の役割を学ぶ。
- ブレイクアウト・ルームに分かれて、チームで議論を行い、6つの役割（政府、民間、スタートアップ、中小企業、社会起業、非営利組織）に基づくLEAN CANVASに取り組む。そして、起業家精神を用いて、問題点と#DecentJobsForYouthの促進のための解決策を見出す。
- LEAN CANVASについてのアイデアを発表する。

成果

- LEAN CANVASの使い方を学んだ。
- 職場での起業家精神を発揮することを意識するようになった。
- 4つの立場（政府、民間、スタートアップ、社会起業）を代表する#DecentJobsForYouthの促進に向けた創造的なアイデアについて発表した。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- より意義ある働き方と経済成長をもたらす、失業問題に立ち向かううえでの社会起業の重要性を、ゲストスピーカーの話から理解する。
- ゲストスピーカーとPY間のネットワークを築く。
- 成果報告のアイデアについて最終検討し、事後活動を考案する。

活動

- アイスブレイクの後、事後活動プロジェクトの議論を行う。
- ゲストスピーカー講義
- 事後活動プロジェクトに関する発表及び投票

成果

- ゲストスピーカーの成功例から大いに触発され、各自がそれを応用する意識が芽生えた。
- PYはとて前めりな姿勢を示し、Arunaの事業と社会に与える影響に関して、ゲストスピーカーにたくさん質問をした。
- 地方のコミュニティを力づけると同時にグローバル企業にもなる代表的な社会的企業の築き方について学んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Ms. Utari Octavianty

(PT Aruna Jaya Nuswantaraチーフ・サステナビリティ・オフィサー)

トピック：社会的企業としてArunaはいかにインドネシアの地方から漁師とその家族の生活を変え、働き方と経済成長の問題に向き合ったか

講義から学んだこと

- ビジネスモデル、組織文化、マーケティング戦略など、社会的企業Arunaについて包括的に学んだ。
- 職場に必要なものを提供することで、地方の沿岸部における女性のコミュニティをいかに後押ししたかを学んだ。
- コロナ禍での経営における一貫性と根気強さをどのように維持するかを学んだ。
- 青年の雇用を支援する方法を学んだ。

(4) 成果報告

PYはディスカッション成果の総括として動画を作成した。動画は、ASEAN及び日本の各国の言語での挨拶から始まり、ブルネイとフィリピンの2名のPYにより以下の点について発表が行われた。

- PYが考えた、ASEAN各国及び日本における働き方と経済成長に関する問題についての説明
- それらの解決策として検討した内容
- 事後活動として、「YEM (Youth Empowerment : ユース・エンパワーメント) 会議」と題したプロジェクトを考案した。これは、DG3のPYが主催し、全てのDGの参加者をユース・アンバサダーとして招待するものである。この会議はオンライン上のウェビナーとして開催され、職場文化、キャリアブ

ラン、コロナ禍後のキャリア観の傾向や変化といった、ASEAN各国及び日本における働き方と経済成長に関して話題になっているトピックを扱う。そして、ワークショップ、キャリア相談、即興ネットワークワーキングなどの活動も行う。

(5) 自己評価

- 本事業で何を学び、どのような成長を自覚しているかについてディスカッションを行った。
- 働き方と経済成長についてのSDGsの要点を広め、ASEAN各国及び日本において、持続可能な働きがいのある人間らしい仕事を増やしていくうえで現実社会に貢献すべく、PYは今後の行動計画（事後活動プロジェクト）を持つに至った。

(6) ファシリテーター所感

当初、私は「東南アジア青年の船」青年会議がオンライン開催であり、実際に船内で行う場合に比べ、示唆に富む経験が減るのではないかと危惧していた。しかし、あらゆる障害がありながらも、毎週日曜のわずか5回の顔合わせで我々のDGに生まれた創造性、協調の精神、そして友情を目の当たりにして驚嘆を禁じ得ない。働き方と経済成長について学んだのはPYだけではなく、私も、グループをととても多様かつ豊かで、非常に楽しいものにしてくれた、様々な背景や経験を持つ全てのPYから多くを学んだ。このようなことから、そして、私を素晴らしい本事業の一員としていただけただことに対して、日本政府及び一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様へ感謝申し上げます。

4 教育グループ

ファシリテーター：Mr. Somkiat Kamolpun

PY：31名

(1) ディスカッション・トピックの論点

生きる・学ぶ：いかに生涯学習の体験と成果を増やすか。

(2) 事前課題

個人課題

全てのPYは、SDGs目標4について概要を読むこと。

国別課題

自国における教育について発表を用意すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 教育、生涯学習、SDGsの基本的な概念や目標について知る。
- ディスカッションからアイデアを生む、発散と収束の技術を使えるようになる。

活動

- ゲストスピーカー講義
- SDGs達成のために必要な能力と、個人、国家、政治、経済、社会の面から見た教育の役割について議論する。

成果

- SDGsを達成するうえで必要な能力として、偏見のない柔軟な考え方、協調性、批判的思考、リーダーシップ及びコミュニケーション能力、臨機応変な適応性、根気強さなどが挙げられた。
- 教育や学習は、特に個人における知識・スキルや行動の成長、そして国家・地域・国際レベルでの政治的・経済的・社会的な発展に及ぼす影響力が大きいと結論付けた。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Asst. Prof. Dr. Romyen Kosaikanont (SEAMEO RIHED (東南アジア教育大臣機構・高等教育開発センター) ディレクター)

トピック：SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」に対する青年の持つ力

講義から学んだこと

- SDGsのために青年が担う役割と重要性。国際、地域、国家レベルでの多くの事例が話し合われた。
- SDGs目標4及び7つのターゲット並びに実行手段。さらに、成果報告の礎となる、SDGs達成の障壁についてグループで議論がなされた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

ASEAN各国及び日本で共通する教育目標や困難、政策について理解する。

活動

- 国ごとに自国の教育制度、困難、方針について発表する。この発表内容は国別課題に該当する。
- 他国の発表を受けて、何がうまくできていて、何を将来的には改善すべきかに焦点を当てて、生産的なコメントを行う。
- 各国で共通する教育目標や困難を明らかにすることで総括とする。

成果

1. コロナ禍からの回復、2. 教育の質の向上、3. 教育へのアクセス向上が、共通する教育目標であった。
1. 時代遅れのカリキュラムや学習法、2. 貧困と不平等、3. 教師の質、4. デジタル・リテラシー、5. 生徒の精神衛生が、共通する困難であった。
- 発表や意見に対してどのように生産的なコメントや提案を行うかを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 生涯学習、教育の質とアクセス、様々な学習法、アウトプット型の教育の概念について理解する。
- (年齢、性別、身体的、精神的に)様々な層の学習

者に必要な能力を明らかにする。

- 学習者の需要に合った、アウトプット型の授業や手法を練ることができるようになる。

活動

- 教育の質やアクセスの概念、様々な学習者層について議論する。
- 小グループに分かれて、従来の学生年代、社会人、高齢者、特別支援の必要な学習者、特に身体的・精神的な障害を持った学習者のそれぞれに必要な能力が何かを見出す。

成果

- 教育の質の概念に関する論説として、1. 非凡さ、2. 完全性あるいは整合性、3. 目的適合性、4. 資金に見合う価値、5. 変容について、理解した。
- アクセスについては、学習者の背景に合わせた授業や手法を設計する過程であることを理解した。
- 講義型、グループワーク、共同作業型の学習など様々な学習方法について理解した。
- 様々な学習者について、何のために彼らが学ぶ必要があり、学習へのアクセスにどのような障壁があるのかなどの知識を得た。
- アウトプット型の授業や手法を練るスキルを身につけた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- 自らの必要性や効果に照らしながら、様々なツールや手法を活用して、困難や課題を明らかにすることができるようになる。
- 明らかにした困難や課題に対峙するプロジェクトを構築できるようになる。

活動

小グループに分かれ、自分たちが取り組みたい課題を定め、プロジェクトを形成し提言を行う。

成果

- 2点の重要な課題が挙げられた。1. 教育への平等なアクセス、2. 教育と労働市場との間に生ずる乖離。
- 1点目については、オンライン／ハイブリッド型の教育手法が平等な教育へのアクセスを向上させると、3チームが主張した。学習者の範囲としては、コロナ禍により登校できない者から、社会人、高齢者、障害を抱えた柔軟な学習が必要な学習者まで挙げられた。
- インターネット通信、情報格差、デジタル技術を活用する能力、オンライン授業の質などに懸念が挙げられた。
- 以下の提言が行われた。1. インターネット・アクセスを促進し、情報格差を減らす、2. 情報通信機器を学習者に付与する、3. インフラ開発への経済的支

援、4. 精神面での支援、5. 個別学習の向上、6. 指導者及び学習者のデジタル・リテラシー向上。

- e. 教育と労働市場との間に生ずる乖離については、時代遅れのカリキュラム及び実社会との連動が薄いことが主要因であると主張された。学習者に将来の仕事に向けて備えさせるためには、カリキュラムを更新し、ソフトスキルを養うことと就労体験を組み込むことが重要であり、さらに、教育の授業策定や運営における各利害関係者とその役割について明らかにする必要がある。

(4) 成果報告

主に教育の質とアクセス、特に不就学児、格差、デジタル・リテラシー、精神衛生上の問題について発表がなされた。また、質の高い教育への共生的で平等なアクセスを確かなものとし、コロナ禍後の時代における生涯学習の促進が目標に掲げられた。そして、以下の提言がなされた。1. 学習者のデジタル・リテラシーと教育インフラの情報技術を促進させること、2. あらゆる背景を持つ人々に対して教育へのアクセスを確かなものとするべく、より柔軟な体制をとり、革新的な教育・学習法を採用すること、3. 学習者にとって必須の能力を育成することに注力したカリキュラムの更新。

(5) 自己評価

PYは、何を学んだかについてフィードバックを行い、自らの研究や仕事に活かすことができた。教育につ

いて、特に障壁や多様な学習者層、教育手法をより知ることができ、さらにデザイン思考やプロジェクト企画の基本概念について理解することができたグループで振り返った。PYはここで学んだ内容、特にグループワークや時間管理、プロジェクト企画や管理、批判的・体系的に思考するスキルを、各自の研究や仕事に活かすことができるだろう。

また、グループ・ディスカッションの場をより積極的に興味深いものにするためのコメントも寄せられた。例としては、ゲーム、アイスブレイク活動、毎回の冒頭で一般的なトピックについて議論する、などである。PYの懸念として特段多かったのは、言語の問題や、本DGのトピックに関する基礎知識であった。

(6) ファシリテーター所感

コロナ禍の中、ASEAN各国及び日本の青年たちに対して、力を合わせて交流し、友情を結ぶ機会を提供した日本政府に賞賛を送りたい。本事業を継続することが、我々の不屈の精神と、いかに地域連携及び草の根の繋がり、そしてSDGsに向けた青年の役割を大切にしているかを物語っている。

ファシリテーターとしては、PYの高潔さ、共感力や互いに協力し学び合う姿勢に感銘した。その能力と可能性の高さを備えた彼らが、近い将来、ASEANと日本の連携やSDGsの達成のための力強い土台となって貢献してくれるだろう。

5 強靱なまちづくりグループ

ファシリテーター：Ms. Pannaritsara Chuenjitrabhiramon
PY：28名

(1) ディスカッション・トピックの論点

特にコロナ禍後を見据えて、現在の世界情勢、環境問題、そしてASEAN各国及び日本における自然災害について理解することで、青年がどのように、持続可能で強靱かつ環境にやさしい、自分たちや他者の未来が明るくなるようなまちづくりができるか。

(2) 事前課題

個人課題

1. 本DGを希望した理由、2. 何を学ぶことを期待しているか、3. 自分が現在住んでいるまちについてどう思うか、4. 青年として、自らのまちをより良くするには何ができて、何をすべきか、について述べた最大500語（英文）のレポートを提出すること。

国別課題

同じ国のPY同士で、自分たちの住むまちの好きな点と嫌いな点、また、変えたい点があるとしたら、その理由とどのように変えたいか、について議論すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- SDGs目標11及びその重要性についての基礎知識を得る。
- 各国の都市計画、ソフト及びハードのインフラ、環境問題や自然災害、そしてなぜ強靱で持続可能なまちづくりが必要かについて、全てのPYがより一層意識を高めるようになる。

活動

- a. PY同士の自己紹介。
- b. 強靱で持続可能なまちとは何かについての意見交換。
- c. 目標11「住み続けられるまちづくりを」を始めとしたSDGsの17の目標と、持続可能な開発に対するその重要性についての紹介。その際、持続可能な開発とは、物質的、財産的、技術的、経済的な開発だけではなく、人間的という点についても含まれている。
- d. ASEAN各国及び日本における環境、自然災害、生活に対するコロナ禍の影響、ソフト及びハードのインフラに関する問題について自らの懸念や意識について共有する。例としては、公共空間、交通インフラ、ごみ処理問題、エネルギー消費、きれいな水や食糧へのアクセス、医療、教育制度、若者の雇用機会、気候変動や汚染問題などである。

成果

- a. 強靱で持続可能なまちについて、より視野が広がった。
- b. 自分たちのまちにおいて、一段と悲惨になり、多発するようになった環境問題、また、ソフト及びハード両面のインフラについて、自然災害や人災が影響を及ぼす可能性のある問題、誤った都市計画や環境への無頓着は人々の生活やあらゆる都市住民の健やかな暮らし、財産、雇用や学習機会を脅かしかねないことについて、かなり意識的になった。
- c. 都市計画やまちづくりにおいては、全ての住民の健やかな暮らしを考慮することの重要性を学んだ。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 実際に強靱で持続可能なまちづくりや設計に関わっている専門家と繋がり、交流して学ぶことで、このようなまちに対しての視野を広げる。
- b. 強靱で持続可能なまちづくりに、自分の情熱や職業をいかに活かせるかを考える機会とする。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. ゲストスピーカー講義で得た学びの共有

成果

- a. まちは、現在及び将来のすべての住民にとって強靱で持続可能な設計と計画を施さなければならないということに、より意識的になった。
- b. 視野が広がり、自分たちが生活の中の活動や職業を通して、まちを強靱で持続可能にすることができると知った。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：1. 菅野勇（三菱地所設計アジア社シンガポール所長・ディレクター）、2. 鯉渕祐子

（三菱地所株式会社スマートエネルギーデザイン部長）
トピック：日本の東京・丸の内における強靱で持続可能なまちづくり

講義から学んだこと

三菱地所及び三菱地所設計の沿革、事業、そして持続可能な開発に重きを置いた目標、そして100年以上前に東京丸の内から始まった両社の持続可能な都市計画や開発について学んだ。そのほか、人間を中心に据えた持続可能な開発、そして持続可能なまちづくりは人の安全性と利便性、地域の将来的な成長に注力しなければならないこと、CLT（直交集成板）のように環境に優しくゴミを生まない物資やエネルギーを使用することの重要性、まちづくりは人・地球環境・利益のバランスを取ることが必要であることを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. チームで協力したり案出しを行ったりして、自分たちのまちに存在する問題の原因とその解決策を明らかにする機会を持つ。
- b. 自分たちのまちに正の変化をもたらすためのリーダーシップや行動をとることを後押しする。

活動

- a. 国ごとに、自分たちのまちの好きな点と嫌いな点、問題の原因、提案する解決策について発表した。
- b. 他のPYの発表を受けて、意見交換や提案・懸念の共有を行った。

成果

- a. 食糧問題や渋滞、教育、医療、歩道の悪状態、騒音や汚染、非効率な官僚体制、汚職、開発途上国に見られる質の低い住宅事情、失業、高齢化など、多くの都市は似たような問題を抱えていると知った。また、先進国と開発途上国とは異なる問題があることも学んだ。たとえば、多くの開発途上国ではスラム街やホームレスの問題を抱えるが、日本では空き家問題があり、シンガポールでは先進的な行政がありながらもゴミ処理問題を抱えている。
- b. 他の都市の良い事例と悪い事例を学ぶことで、強靱で持続可能なまちづくりに対して視野を広げることができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. リーダーシップを発揮し、既存の枠にとらわれない考え方をもち、行動を起こすことで、SDGs目標11に適う、強靱で持続可能なまちづくりを行う後押しをする。
- b. まちづくりプロジェクトを企画し、自らが情熱を持つものを活かしてまちを強靱で持続可能にする、と

いう機会を与える。

活動

- a. 強靱で持続可能な自分の理想の都市におけるソフト及びハードのインフラについて、また、いかに人・地球環境・利益のバランスの取れたまちづくりができるかについて議論した。
- b. 特にコロナ禍後を見据えて、強靱で持続可能なまちづくりに対する情熱とキャリアプランを携えた青年として、そのような自分の理想の都市で何ができるかを議論した。

成果

強靱で持続可能なソフト及びハードのインフラ、また、人・地球環境・利益を等しく考慮したシステムや活動に注力した、まちの理想像を作り上げた。

(4) 成果報告

全4回のディスカッションの成果として、理想的な強靱で持続可能なまちについて発表した。発表では、多くの都市で起きている環境及び社会課題、ソフト及びハードのインフラに被害を与える自然災害や人災、そして環境にやさしい社会的・文化的な活動による人の安全・地球環境・利益を考慮した、新たな強靱で持続可能なまちづくりについて語られた。

(5) 自己評価

このDGでの学びや得たもの、参加して自分がどう変わったかについて話し合われた。

(6) ファシリテーター所感

全てのPYが成果発表に向けて協力し助け合うようにするため、成果発表の準備のための時間を設けて参加必須とすることが、本事業にとって有益だと思料する。

6 健康とウェルビーインググループ

ファシリテーター：Ms. Carmela D. Barcelona

PY：33名

(1) ディスカッション・トピックの論点

より健康的な明日のために、今日の青年はどう変化を起こせるか。

(2) 事前課題

個人課題

- a. 以下について自分に関する動画（最長1分間）を撮影すること。
 - ・ 名前
 - ・ 国と出身地
 - ・ このDGに期待すること
 - ・ 自分の今の健康状態を5段階（1～5）で評価
- b. グループ・ディスカッションに備えて、以下の資料を読み込むこと。
 - ・ ランセット委員会「グローバル・メンタルヘルス及び持続可能な開発」
 - ・ 世界保健機関（WHO）「メンタルヘルス・アクションプラン2013 - 2020」
 - ・ アドボカシー・ガイド：WHOメンタルヘルス・アクションプラン更新版
- c. 資料に関連して、以下に対する回答を提出すること。
 - ・ 自国でのメンタルヘルスに関する主な問題は何か。
 - ・ 自国でのメンタルヘルスに関して現在行われている取組は何か。

- ・ 青年が主導するものを含め、自国でのメンタルヘルスを守り、また、メンタルヘルスの対策を促進している最優良事例を挙げよ。
- ・ メンタルヘルスを促進している主な利害関係者（公共・民間）は誰か。
- ・ 自国では、メンタルヘルスに関する国家計画や戦略はあるか。主な目的・戦略・介入手段について概説せよ。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. 健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについて定義する。
- b. コロナ禍前、また、コロナ禍での個人の状況における健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについて理解する。

活動

- a. 健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングの定義について図画を用いて各自取り組み、全体で共有を行った。
- b. 各自が自分を最もよく表すものを用いて、自己紹介を行った。

成果

好評だったのは、自分や健康、メンタルヘルス、ウェルビーイング、そしてそれらがコロナ禍の生活でどう影響を受けたのかを主題として各自ユニークに表現したことであった。また、各自異なっているにもかかわらず、似たようなものを見方をしていることに気づき、健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについての共通見解を持った。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- メンタルヘルスに関する国際事情について述べる。
- SWOT分析（強み・弱み・機会・脅威）を用いて、メンタルヘルスについての国家レベルの最優良事例や格差について議論する。

活動

- ゲストスピーカー講義
- 国別に分かれ、メンタルヘルスについての自国での最優良事例や格差についてSWOTを用いて議論し、国ごとに全体で共有を行った。

成果

各国におけるメンタルヘルスを取り巻く現状の障壁や戦略を明らかにして、ASEAN各国及び日本でのメンタルヘルスに関する状況が類似していることに気づいた。これは、「東南アジア青年の船」青年会議の戦略的なプラットフォームを、地域内で提携して調和のとれた解決策を作り上げる一つの機会として認識させるものとなった。既にSWOTに慣れている者もいたが、他のPYにとっては、新たな学びとなった。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Dr. Agnes Joy Casiño
（フィリピン共和国保健省国立メンタルヘルスセンター
戦略管理・連携オフィス責任者・医務官）

トピック：国際的・地域的なメンタルヘルスの概要

講義から学んだこと

1. メンタルヘルスの問題についての国際的及びASEAN各国・日本の統計情報、2. コロナ禍が健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングにどのような影響をもたらしたか、また、それによりメンタルヘルスを守り促進する緊急の必要性がどのように浮かび上がったか、3. ストレスへの健康的な対処法について学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- ASEAN各国及び日本におけるメンタルヘルスに関する優先的な行動領域を明らかにする。
- メンタルヘルスを取り巻く内外の利害関係者について相関図を作る。

活動

- 冒頭に10分間のマインドフルネス活動を行い、一部のPYがその活動中に何を知覚したかを共有した。
- 前回は行った包括的なSWOT分析を用いて、ASEAN各国及び日本において共通する、優先的に解決すべき問題の上位5つを定めた。
- 優先的な問題に照らして、それらを解決するうえで青年が連携できそうな内外の利害関係者について相関図を作った。

成果

DGとして、素晴らしいチームワークと批判的思考で、開かれた議論を行った。率先して議論を主導するPYが直ちに現れ、その後、活動内容を記録する役目に2名が名乗り出た。PYは事例を引用し、各々の国の状況を伝えながら、自分たちが選んだ優先的に対処すべき問題について明瞭に説明することができた。発想豊かに、そして柔軟に、投票やブレイクアウト・ルームの機能を用いることで、素早い意思決定や効率的な議事録作成が可能となった。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- ASEAN各国及び日本における調和のとれたメンタルヘルスに関する行動計画を作成する。
- 成果報告の準備。

活動

- 冒頭に10分間のマインドフルネス活動を行い、前回話すことができなかったPYが、何を知覚したか共有した。
- 各国が揃うように3チームに分かれて、前回の上位5つの優先課題への対処計画を、図表を用いて作成した。各課題に対して、戦略的目的、活動、ターゲット層を設定し、適切な内外の利害関係者と結び付けた。これらは全体で共有がなされた。
- 成果発表の準備を進めるための委員会を、各国から1名ずつ集めて結成した。

成果

ASEAN各国及び日本における優先課題を対処することに役立ち、メンタルヘルスを守り促進する既存の戦略を強化するような、青年主導の活動を提案するうえで、PYたちは問題解決スキルを発揮した。国混合の班分けは、各自が自国について話すことを促し、なかには進んで班のリーダーや議事録、発表者を担う者もいた。最後に、本DGの発表のための委員会は各国からメンバーを募り、国ごとに成果発表に向けて望ましいトピックが選択され、提出やトピック課題のまとめ、委員会、予行演習に向けた予定が組まれた。

(4) 成果報告

ブルネイ、インドネシア、マレーシアのPYがグループ・ディスカッションの要点について発表を行った。それには、健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについての図画を用いた定義、内外の利害関係者、共通する優先課題、ASEAN各国及び日本での現在のメンタルヘルスについての取組、本DGの行動計画の統合版が含まれた。質疑応答では、メンタルヘルスに対処する際の典型的なメディア例についての質問に、タイのPYが包括的に回答した。

(5) 自己評価

全員で「東南アジア青年の船」青年会議での個人及びチームとしての成果について振り返りを行った。具体的には、最初は消極的であったがすぐに場に慣れたこと、人前で話すことへの尻込みや英語で話すことへの自信の無さを、友好的で居心地の良い雰囲気のおかげで乗り

越えることができたこと、批判的思考力や問題解決スキルを伸ばし、相互に学び合うなどを期待通りにできたこと、助け合ったチームワークと明るい雰囲気、素晴らしいアイデアが全員に対して、十分に共有されたことを一人ひとりが感謝している、などである。

(6) ファシリテーター所感

時間管理について、特に最初の2回においては難しかったが、スクリーンタイマーの使用や各自の効率的なプレゼン能力と意識改革により段々と改善された。総じて、グループ・ディスカッションに対して、大半のPYは満足又は大変満足と回答し、また、回を追うごとに満足度が上がっていった。さらに、多くのPYが総合的な自己評価を非常に良い又は素晴らしいと回答している。PYの多大な努力、創造的なアイデア、事前課題における熱心な取組、そして全体及びブレイクアウト・ルームでの議論は大変賞賛に値するものであった。

7 森林環境及び生物多様性グループ

ファシリテーター：Dr. Vivien How

PY：27名

(1) ディスカッション・トピックの論点

青年の力を活かして持続可能な森林環境及び生物多様性をより豊かにするうえでの課題と機会は何か。

(2) 事前課題**国別課題**

同じ国のPY同士で、自国における「持続可能な環境に対する危機や汚染といった問題への地域的・国家的な手立て」を共有すること。国ごとにパワーポイントにまとめられた5分間の発表を行う。

(3) 活動内容**グループ・ディスカッションI****ねらい**

- 森林環境及び生物多様性に関する問題の一般的知識を得る。
- ASEAN各国及び日本における環境問題への解決策について理解し、地球のエコシステムと生物多様性に対する潜在的な環境危機と結び付ける。

活動

- PY同士によるアイスブレイクの時間を取った後、「森林環境及び生物多様性」についての各自の考えや意見を話し合った。
- SDGsについて、また、森林環境及び生物多様性に関

するSDGs目標15のゴールとその尺度について、ファシリテーターから説明した。

- ASEAN各国及び日本における、複雑で一筋縄ではいかない環境問題をめぐる状況に対処するうえでのシステム思考の考え方をファシリテーターが論じた。
- グループ型のシステム思考の練習を行った。ASEAN各国及び日本における環境事情や環境危機、また、そのような状況の中、地球のエコシステムや生物多様性に対して起きる影響を氷山モデルにまとめた。

成果

- 環境関連の開発問題が相互に結び付いていることを浮かび上がらせるための問題解決枠組みの基礎として、システム思考を用いることができるようになった。
- 環境問題に対する視野が広がり、氷山モデルに取り組んだ際には、顕在化していない要素を含めて環境問題を見ることができるようになった。

グループ・ディスカッションII**ねらい**

- 気候変動及び森林破壊に関する事例を通じて、ASEAN各国及び日本の青年と持続可能な環境に向けた地元及び地域的な解決策を結び付ける。
- 様々な国の各事例について、他の地域でもできるかどうか、文化や社会経済的背景の違いを考慮して議

論する。

活動

- a. 地元又は地域の事例を通じて持続可能な環境に向けた解決策をまとめ、共有した。
- b. 共有された事例に基づき、ASEAN各国及び日本の青年が環境問題の解決を実現するにあたっての課題や機会について議論した。

成果

- a. ASEAN各国及び日本における文化横断的な議論を行いながら、環境問題に対する様々な慣行の背景や目的について学んだ。
- b. 国ごとの強みや弱みに基づいて、各種環境プログラムの継続や実施における機会及び課題を明らかにできるようになった。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. ASEAN各国及び日本における制度的な持続可能性を構築するためのツールとしてサイエンス・コミュニケーションを活用した環境活動に対する青年の参加を促す。
- b. 青年を巻き込み、森林環境及び生物多様性を促進するうえでのサイエンス・コミュニケーションにはどのような側面があるのか探る。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. 事例研究

成果

より豊かな環境を促進し、自らの思想信条を行動に起こすことに青年を巻き込むなど、サイエンス・コミュニケーションの各側面について学んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Heng Kiah Chun（グリーンピース・マレーシア活動家）

トピック：サイエンス・コミュニケーションと公衆関与を通じた環境活動に対する青年の参画

講義から学んだこと

- a. 科学を戦略的に利用して、自らの主義主張をしっかりと発信し、意思決定に影響を与え、環境問題に対する行動を動機付けることを学んだ。
- b. 様々な立場（行政、民間、非政府組織）における、環境問題に対する自らの考えを行動に起こしたサイエンス・コミュニケーションの事例を複数知った。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

ASEAN各国及び日本における適切な戦略や守るべき原則について概説することで、持続可能な環境管理に関する青年の行動について課題と機会を探る。

活動

- a. PYは、様々な立場（行政、民間、非政府組織）に分かれ、持続可能な環境と森林環境及び生物多様性の問題に関する青年の行動についてのロールプレイを行った。
- b. ASEAN各国及び日本におけるより緑豊かな環境を促進する政策や戦略を共有し、地球市民としての課題や機会についてまとめた。

成果

- a. より緑豊かな環境の促進に加わったり実行したりするうえでの様々な切り口について、地球市民として自らの考え（機会や課題）を話し合った。
- b. ASEAN各国及び日本において将来的に取り入れられる、組織的な環境イデオロギーについてまとめた。

(4) 成果報告

本DGのトピック「森林環境及び生物多様性」についての発表は、ASEAN各国及び日本における森林破壊の状況を統計と動画を用いて紹介することから始めた。次に、より豊かな環境を確保するための行政、民間、非政府組織による現行の優良事例、そしてASEAN各国及び日本において将来的に取り入れることができる可能性のある、「ユース・シーディング・ハウス」という青年による種まきプロジェクトの持続可能な解決策を紹介した。その後、より豊かな環境を呼びかける全体メッセージをもって締めくくった。

(5) 自己評価

PYは自己評価についてチャットボックスにコメントを書き込んだり発言したりした。また、PYとファシリテーター双方の評価や、本DGの単元や活動についてもコメントした。そして、SNSを通じて、より環境を豊かにしていくため、啓蒙活動を続けることがPYから提案された。

(6) ファシリテーター所感

グループ・ディスカッションが始まる前に基礎知識について各PYが理解できるように、事前の設問や課題を与えた。今後の事業ではPYの参加割合を上げるために、他のDGの発表スライドや資料を共有したり参照したりできるプラットフォームを設けると良いかもしれない。

8 海洋環境グループ

ファシリテーター：Ms. Nutch Charoenboon

PY：28名

(1) ディスカッション・トピックの論点

青年のリーダーは、いかにSDGs目標14の理解と、海洋分野の各利害関係者の優先事項を勘案して、人類と海洋の持続可能な関係性を支えるプログラムを設計できるだろうか。

(2) 事前課題

個人課題

- a. ファシリテーターによる導入動画を視聴すること。
- b. 自己紹介の設問に答えること。

国別課題

自国における現在の海洋状況について5分間の発表を用意すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. グループ及び個人の目標を立てる。
- b. 国、ASEAN、そして地球レベルでの現在の海洋状況について理解する。
- c. 現在も進行する海洋及び生活にまつわる問題と、どのようにSDGs目標14がそれらを軽減できるかを認識する。

活動

- a. 各自簡潔に自己紹介した後、自分の目標を共有し、本ディスカッションの流れについて学んだ。
- b. 海洋に関する自国の状況と動きについて共有した。

成果

- a. PY及びファシリテーターは、DG活動を通じた価値ある経験を生むうえでの各自の役割を認識した。
- b. 海洋をめぐる現況について理解を深め、ASEAN各国及び日本は似たような特徴を持つことに気づいた。例えば、利用可能な資源、課題、解決に向けた現行の取組などである。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 人による些細で「無害な」行動が、地球環境に多大な影響を及ぼし得ることを認識する。
- b. 狭い範囲でも何ができるのかについて考え始める。

活動

- a. 人による些細に思える慣行が知らず知らずのうちに海洋に悪影響を与え得ることを互いに共有した。

- b. どのように自分たちが#SSEAYP2021SaveTheOceanChallenge (SSEAYP2021海を守ろうチャレンジ) という活動を通じて、海洋に対して正の変化を起こし、他の人々に運動への参加を働きかけることができるか話し合った。
- c. 各国における海洋保護分野の経験(非政府組織やスタートアップ企業など)で得た教訓について検討した。

成果

- a. 自分たちがいかに海洋や人々に対して悪影響を与えてきたかを振り返り、自らの行動や習慣を変えて、周りの人々にもこの取組に加わるよう働きかけることを決意した。
- b. 小さな行動が大きな影響を生み出すこと(バタフライ効果)を知り、個人の変化を集団的な行動に転化させることで、より大きな成果を生むことについて考え始めた。その際、各国における海洋及び環境団体の事例が用いられた。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 見本となる団体とそのプロジェクトについて学び、それらのミッション、手法、課題、成功について振り返る。
- b. いかにポジティブな変化を生み出すか批判的に考え、その変化による波及効果について認識する。

活動

- a. 海洋保護団体に所属するPY2名が、正の影響を生むための組織運営の経験について話し、ファシリテーターが東南アジアにおける自身のプロジェクトの調査結果について共有した。
- b. #SSEAYP2021SaveTheOceanChallengeの活動を通して得た変化を生み出す経験と、この活動で得られた教訓を将来の取組にどう活かすかについて話し合った。
- c. 自分たちが聞き取りを行った、もしくは調査した非政府組織の活動について発表し合った。

成果

- a. 地元で活躍する存在に触発され、また個人・組織の成功や課題に基づく教訓を自分たちのプロジェクトに活かすことができた。
- b. 各国における事後活動のガイドラインとして用いることが可能な海洋保護プロジェクトを立てた。これらのプロジェクトは当初期待する成果のみではな

く、長期及び短期の影響、そして悪影響までを見据えたものである。また、PYは自らのビジョンについて、成功の測定尺度、資源、取組の持続可能性に至るまで、建設的に考えた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 「上意下達（トップダウン）」な解決策の中で大抵目を向けられていない地元の現実について認識する。自然と人類の双方を考慮している一例として、ゲストスピーカーの組織による活動を知る。
- b. 善意の行動が期せずしてプロジェクトの企図していた正の結果を損なう可能性があることを知り、いかにプロジェクトがそのように陥らないようにするか、発想豊かに考える。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. 各国における非政府組織や団体に聞き取りを行った調査したりして、海洋保護のアイデアを強化するヒントや有用な人脈を見つけた。また、試行錯誤を通じて取組を推進するのではなく、成功例や課題を「現場」から研究して、それらを状況に合わせて応用できるようにした。
- c. プロジェクトの主軸を、ターゲット層を必ずしも「啓蒙」することにせず、ターゲット層との協力や協働に向ける方法を探った。というのも、知識や認識があっても、行動に移されることはまれであることが実証されているからだ。そして今後のプロジェクト（任意の分野）を形作る練習を行い、一般的に短期になりがちなプロジェクト目標のみならず、長期の成果と予期せぬ結果についても検討した。

成果

- a. 集団での対処を求められる課題に対して、持続可能な変化を生み出す方法についてのアイデアを得た。
- b. 解決策を推し進める際のボトムアップ型のアプローチについて新たな着想を得た。
- c. 現実的な海洋保護計画を立てる中でSDGs目標14に対する青年のリーダーシップに向けての段階を着実に踏み、各々の状況に合わせて最もうまく機能させるべく、互いに助け合ってアイデアを発展させた。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Ryan Lewis（ブルー・ベンチャーズ（英国）エコツーリズム事業開発・マーケティング部技術顧問）※同社は、Save Andaman Network（タイ）及びYAPEKA（インドネシア）と提携している。

トピック：ブルー・ベンチャーズの概要説明

講義から学んだこと

- a. ブルー・ベンチャーズの成功要因は「人間ファースト」の手法を取っていることであり、活動や意思決定の全過程に地元のコミュニティの人々が関わっている。我々のように変革を主導しようとする立場の者は、こうした人々に耳を傾けて、関わりを持ち、その意見や生き方を尊重する必要がある。
- b. 対象地域における既存の組織との提携は、地域に合った形での施策を行うことに役立ち、自身で一から始める場合に比べてより効果的になる。

(4) 成果報告

他のDGのPYと共有すべく、本DGで何を学んだかについて意見を出し合い、トークショー型の動画でその内容を伝えた。DGのメッセージと経験はトピックごとに分類され6名のPYによって発表された。分類トピックは、海洋問題への導入、SDGs目標14、日常生活やその他のSDGs目標と海との繋がり、青年の関わり、影響を被る当事者への考慮と関与である。発表を終え、PYはその結果に満足しているとのことだが、他のDGに比べてあまり質問を受けなかった。DG8のPYは、他のDGのPYが、日常の意思決定の際に海に想いを馳せることはとても簡単であることを理解し、将来にわたって海について考え続けることを期待している。

(5) 自己評価

活動

- a. ファシリテーターは、全員の事前課題から抜粋した「期待すること」のリストを共有し、PYは当初の期待に対して何を果たしたか振り返ってグループ全体で話し合った。SDGs目標14は他の世界的課題に比べて注目を受けていないことから更に海洋保護へ意識的になったこと、このDGで協働した経験、そして仕事での繋がりも生まれることが予測される新たに築かれた友情などの振り返りが挙げられた。
- b. PYの経験を表した一言の例として、以下が挙げられた。目が覚めた、視野が広がった、ためになった、対等、ファミリー、効率的、支え合い、意欲的、示唆に富む、ラブ。
- c. 「DG8で学んだ今、今後5年間の海洋との関わりについて」を題材に未来の自分に宛てた手紙を書いた。これらの手紙はパスワード保護されてDGのオンラインクラウド上にアップロードされた。2027年1月9日に、ファシリテーターがDG同窓会を開いてこれらの手紙を参加者に返し、その時点でのPYの成長や目標について振り返りを行う予定である。

(6) ファシリテーター所感

世界的なパンデミックにもかかわらず、オンラインで

事業を開催できたことが参加者に交流する機会を与え、一緒に頑張る経験をして、関係を築くことができた。一方で、対面で交流する機会がないため、非公式な会合や活動を行って公式のスケジュールを補ったが、これが本番における温かな場づくりに、そしてPYとファシリテーターと一緒に更に効率的に動くうえで役に立った。

PYも、これらの活動が「東南アジア青年の船」青年会議の成功に極めて必要不可欠であった、と言っていることから、こうした活動が公式に認定され、例えば、非公式な活動・追加ワークショップ・カジュアルな会合などにも、適切なガイドラインと財務的支援が提供されると良いと思料する。

9 持続可能なエネルギーの利用グループ

ファシリテーター：Ms. Sitta Marattanachai

PY：30名

(1) ディスカッション・トピックの論点

あらゆる人のためのエネルギーのデジタル化、脱炭素化、分権化を推進するうえで青年はいかに貢献できるか。

(2) 事前課題

国別課題

自国のエネルギー事情の概要を調査すること。これにより、用語、現況、エネルギー問題に関する課題について詳しくなることが期待される。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

現在の国際的、地域的及び地元のエネルギー事情と課題について、PYが理解する一助とする。

活動

- a. 全員による自己紹介
- b. 気候変動及びエネルギー供給に関する現在の国際的な課題について、ファシリテーターが概説した。
- c. 「私の国におけるエネルギー事情概説」と題してPYが4分間の発表を行った。
- d. 8つのグループによる発表の後、意見交換を行った。
- e. Miroというオンライン・ホワイトボード上でファシリテーターが課題を提示した。PYは、自身が興味を持つエネルギー課題は何か、何が発生し、何が引き起こし、誰が影響を受けたのか、について回答した。

成果

- a. 自国でのエネルギー・システムについての知識を得て、分析を行い、他国の例から興味深い結論を導くことができた。
- b. 議論が骨太で、PY同士の話し合いで価値ある示唆を得ることができた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 脱炭素化とは何か、なぜ重要なのか、エネルギー・システムへどのような影響があるかを理解する。
- b. 選択したトピックごとに4つのチームに分かれる。

活動

- a. 温室効果ガスの排出と脱炭素化についての基本を以下2本の動画から学んだ。
 - (a) なぜ我々は脱炭素化に向かっているのか。
 - (b) 炭素の削減はどのように価値を生み出すのか。
- b. デザイン思考の手法（観察・共感、定義、概念化、試作、テスト）にディスカッションの過程が基づいていることや、イノベーションの過程を学んだ。
- c. 持続可能なエネルギーに関する課題を分析するべく、各自の興味関心ごとに4チームに分かれた。
 - (a) よりクリーンなエネルギーへの移行
 - (b) エレクトロモビリティ
 - (c) 再生可能エネルギー技術
 - (d) 脱炭素に関する政策

成果

- a. イノベーションの過程について理解し、温室効果ガスの削減に技術がどのように役立っているかという事例に感心した。
- b. 持続可能なエネルギーの他国における課題について振り返ることができ、脱炭素化したエネルギー・システムの重要性を強調した。
- c. 持続可能なエネルギーに関する課題に対処する技術の活用に興味が増した。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Danny Kennedy
 (ニュー・エナジー・ネクサス最高エネルギー責任者)
 トピック：気候変動問題に関する行動の未来

講義から学んだこと

- a. 気候変動問題に関する行動の未来及びその背景にある技術。
- b. よりクリーンなエネルギーへの移行がどうして重要で、なぜ我々は持続可能なエネルギー技術を取り入れるよう努力し、より責任あるエネルギー消費者にならなければならないのか。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 持続可能なエネルギーに関する課題に対処するため、デジタル時代におけるエネルギー技術について定義できるようになる。
- b. より広い視野を持って、具体的なエネルギー技術の課題や機会について比較対照する。

活動

- a. ネットワーク作り及び互いを知って友達となるため、PYは無作為にブレイクアウト・ルームに振り分けられた。
- b. 「エネルギー・システムにおけるデジタル化」という動画を視聴して、デジタル・トランスフォーメーションの基本について、また、いかにデジタル技術が将来の持続可能なエネルギーに影響するのかを学んだ。
- c. 小グループに分かれて議論を行った。
- d. 全体では、小グループでの議論や考えについて共有した。

成果

- a. エネルギー課題に対してより持続可能な解決策を開発するため、エネルギー・システムにデジタル技術を組み込むことの機会や課題について議論し示唆を得た。
- b. デジタル技術と自分たちのエネルギー消費の傾向について結び付けて考え、また立場によっては技術へのアクセスが困難な場合もあるということに気づくことができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

エネルギーを取り巻く利害関係者が分散的なエネルギー・システムを用いて持続可能なエネルギーを使用することを後押しするため、PYがこれらの人々について行える支援を考える。

活動

- a. エネルギーの分散化に関する基本及びエネルギー・システムの将来像について学んだ。
- b. エネルギーの分散化についての概念や関連事項の動画を3本視聴した後、エネルギーの課題について小グループで議論した。
 - (a) どのように送電網の不安定さを直すか

- (b) コロナ禍での地方に対して分散化とグリーン・エネルギーが担う極めて重要な役割。
- (c) ブルックリン地区におけるブロックチェーンを用いた送電網 (CNBC制作)
- c. 小グループに分かれて「分散化したエネルギー・システムを敷くことによる問題と機会とは」について議論した。
- d. メインルームに戻って、小グループでの議論で学んだことを話し合った。
- e. 本DGの最終課題である2分間ビデオについてファシリテーターが説明した。

成果

- a. 分散化、また、どのように未来の技術が経済成長の機会や脱炭素、エネルギー管理における地域の取組を生み出し得るか、などについて知識を得た。
- b. 全4回のディスカッションから学んだ内容や個人的な成長について、1人1文で振り返りを行った。ほとんどのPYがリーダーシップやディスカッション・スキルの観点で仲間から触発されていた。

(4) 成果報告

重要なエネルギー課題について、以下3点の解決案を発表した。

- a. 電気自動車の範囲の限界、長時間の充電、メンテナンス問題は旧来のエンジンに代わるエレクトロモビリティにとって障害だと議論されてきた。しかし、より環境にやさしく、ガソリンより安価で、内燃機関よりも速い利点がある。
- b. 次世代送電網こそが未来の電力供給の在り方であり、ブロックチェーン技術がその運用管理に用いられ、電力資源のより良い管理のためにはスマート・メーターが使用可能量や使用データを表示してくれる。
- c. 持続可能なエネルギー・システムでは、カーボンオフセットの機会が民間による投資や国際協調を促進する。消費慣行の変化やカーボンフットプリントの削減は、スタートアップや政治家、ASEAN各国及び日本の市民にとって大きな市場である。

(5) 自己評価

各自5分間の振り返りの後、このDGで何を学び、何を得たのかをヘッド・ハンド・ハートモデルを用いて共有した。

(6) ファシリテーター所感

総じて、東南アジア及び日本における現在のエネルギー事情やそれによる課題についてのコミュニケーションや議論は賞賛に値した。なかには当初、持続可能なエネルギーという分野に対するモチベーションに欠ける者

もいたが、各回を通じて、本トピックについて学び、議論することができた。予定通りに全てのディスカッション活動をカバーすることはできなかったのだが、それは

PYに対してよりネットワークと友情を結ぶ時間を割くために内容の簡略化を行ったためである。